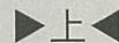


第91回センバツ

つかめ 栄冠

八学光星ナイン



全国から精鋭32校が出場し、兵庫県西宮市の甲子園で23日から12日間の日程で第91回選抜高校野球大会が開催される。青森県からは、昨秋の県大会と東北地区大会をそれぞれ制した八学光星が3年ぶり10度目の出場を果たす。東北勢悲願である全国制覇とともに、平成最後のセンバツ王者を目指し、熱戦を繰り広げる。

「一体感のある、とても雰囲気の良いチーム」。仲井宗基監督は新チームをこう評価する。昨年10月の東北大会では辛抱強さとチーム力を存分に発揮し、5年ぶりの優勝に輝いた。技術面、精神面共にチー

ムの柱となっているのは主将の武岡龍世、下山昂大ら昨夏の甲子園を経験した選手たち。2回戦で大敗した悔しさを忘れず、「リベンジする」との気持ちを練習にぶつけてきた。

また、昨秋に力を発揮したのは甲子園でのプレーをあと一歩で逃したメンバー3人。後藤丈海は新チームでエースナンバーを背負い、近藤遼一は4番を務め、山田怜卓は投手陣の一角を支える。昨夏の県大会に出場したが、「大舞台」でベンチ入りはならなかった。「自分たちもこの場所で野球をしなければ…。絶対に(甲子園へ)戻ってこよ

「チーム力」で東北頂点

う」。昨年8月4日の開会式リハーサル。入場行進の練習をするチームメイトをスタンドから眺めながら3人は誓い合った。センバツへの道のりとなる県大会、東北大会で、原動力となったのは選手それぞれ「悔しい」という気持ち。各試合でヒーローが誕生した。

東北大会では、初戦の2回戦でそれまで三塁手だった下山が投手としての実力を披露し、近藤は準々決勝で勝ち越し打を放った。後藤は何度も走者を背負う場面がありながら落ち着いた投球を続け、決勝の盛岡大付戦では3投手が継投でリードを死守。「チーム力」を印象付けるような試合を見せつけ、東北の頂点に上り詰めた。

しかし、そんな勢いに乗ったチームに転機が訪れた。

る。全国10校が出場した昨年11月の明治神宮大会に7年ぶり2度目の優勝を目指し、東北王者として臨んだが、準々決勝で敗退。「打撃は通用するが、バントや走塁など細かいところでミスをしては勝てない」。投手力などを含め、全国との差を実感することになった。

(里村静)

夏の大会 悔しさを忘れず



昨秋の東北地区大会決勝。優勝を決め、応援団の待つスタンドに駆け寄る選手たち＝2018年10月、秋田市こまちスタジアム